



## 八戸版防災教育副読本「防災ノート二訂版」を改訂し、 新たに三訂版を配布します

### 1 これまでの「防災ノート二訂版」について



八戸市教育委員会では、東日本大震災の教訓を踏まえ、児童生徒が防災に関する知識をもとに判断力や行動力などを身に付け、「自分の命は自分で守る」ことができるよう、平成27年度から八戸版防災教育副読本「防災ノート」を市立全小・中学校の児童生徒に配布し、防災教育を推進してきました。

防災ノートは、児童生徒の発達段階に合わせて「小学生下学年（1～3年生）版、上学年（4～6年生）版、中学生版」があり、現在は二訂版となっています。

### 2 新たに改訂した「防災ノート三訂版」について

近年の異常気象や自然災害が全国各地で甚大な被害をもたらしていること、新型コロナウイルス感染拡大により感染症対策を含めた防災対策の見直しが急務となっていることなどから、防災ノートを改訂し、三訂版を作成することとしました。

改訂に際しては、作成アドバイザーとして、前回に引き続き、八戸工業大学、青森県防災士会の御協力をいただくとともに、今回は全てのイラストを八戸工業大学の学生の皆様に作成していただきました。また、市立小・中学校防災ノート研究委員の教員が、これまで以上に日常的な活用が図られるよう、授業実践をもとに内容や形式を見直してきました。



授業実践の様子（桔梗野小学校）

#### 【主な改訂のポイント】

- (1) 津波、洪水等の各種最新ハザードマップを掲載するとともに、1人1台端末を活用して学習が進められるよう、それらの二次元コードも掲載しました。
- (2) 災害は学校以外でも発生することが想定されるため、家庭で防災について話し合いができるよう、「家族会議欄」を関連するページに掲載しました。
- (3) 東日本大震災から10年以上が経過し、当時、幼かったり、生まれていなかったりする児童生徒が大半となっている現状を踏まえ、震災の伝承として、「大久喜地区の奇跡の鳥居」の物語を掲載するとともに、八戸市みなと体験学習館（みなっ知）、八戸市津波防災センター等の防災関連施設を新たに掲載しました。
- (4) 避難所での感染症対策や非常持ち出し品の確認欄に、感染症に留意した項目等を盛り込みました。

本年8月頃、市立全小学校1年生、4年生、中学校1年生に「防災ノート三訂版」の「冊子」を、その他の学年には「追加シート」を配布する予定です。また、多くの皆様に活用していただくため、市のホームページにPDF形式のデータも掲載する予定です。

今後、いつ発生するかわからない災害に備えるため、学校、家庭、地域社会、関係機関のさらなる連携が求められています。各地域において、「防災ノート三訂版」を活用するなどして、自他の命を大切にする防災教育や互いに助け合う防災訓練などを通じて、地域全体で青少年の健全育成に取り組んでいきましょう。

## 寄り添う心と寛容さ

八戸市教育委員会  
教育長 伊藤博章

※梅雨明けも間近というのに心が晴れないのはなぜだろう。連日、テレビに映し出されるコロナや理不尽な事件や事故、生活や生命が一瞬にしておびやかされるような自然災害もいまや日常的になってきました。さらに追い打ちをかけるような不安定な世界情勢、いずれも終息が見通せず不安な日々が続いています。子どもたちは学校でも家庭でも制約の多い中、元気に過ごしてはいますが、教員や保護者同様、かなりのストレスにさらされているのが現実です。

※時代は変われど、子どもたちの生活では様々なトラブルが起こるものです。そこで大切にしたいのは結果だけを見て判断するのではなく、解決の過程で事の善悪に気づき、互いに許し合う寛容さを学ぶことではないでしょうか。昨今、社会から、この寛容さが失われつつあるように感じています。

※学校のみならず、家庭や地域社会が教育の場として十分な機能を発揮することなしに、子どもの健やかな成長はあり得ません。寛容さは、親子の触れ合い、友だちとの遊び、地域の人々との交流など、様々な活動を通じて培われていくものです。

※子どもに一方的に大人の言い分や考えを押しつけてはいませんか。親の成功例や教訓は多少の参考にはなると思いますが、これからますます変化の激しい社会を生き抜いていく子どもたちに必ずしも当てはまるとは限りません。こうした時代だからこそ、目には見えない子どもの心に向き合える大人になりたいものです。

※わたくしごとですが「転ばぬ先の杖」とでも言いますか、人生の先輩としてわが子を守りたいがゆえに、あれやこれやと口を出し後悔してしまったことがあります。振り返ってみれば、親の基準や価値観に縛られた子どもは親の期待に応えようと、自ら進みたい道をじっくりと考える時間も心のゆとりさえもなくしてしまったのです。大切なのは、目の前にいる子ども自身の視点に立って「今なにを求めているのか、悩んでいるのか」、親としてそっと寄り添う心と寛容さを忘れてはならなかったと自戒しています。

※コロナ禍の三度目の夏が来ます。夏空に子どもたちの明るく元気な声が響く日が長く続きますようにと、切に願います。

